

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	藤本 智美
学位授与の条件	学位規則第4条第①、2項該当		
論文題目			
<p>The influence of coping types on post-traumatic growth in patients with primary breast cancer (原発性乳がん患者の心的外傷後成長に対するコーピングタイプの影響)</p>			
論文審査担当者			
主査	教授	折山 早苗	印
審査委員	教授	森山 美知子	
審査委員	教授	國生 拓子	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>乳がんと診断された女性に与える身体的・精神的なインパクトは大きく，これまでも乳がんによる精神的健康への否定的な側面については，さまざまな先行研究がなされてきた。しかし近年では，ストレスフルな出来事による否定的な側面だけでなく，肯定的な側面として心的外傷後成長（post-traumatic growth）への関心が高まっている。一方，ストレスコーピングに関する研究では近年新たにポジティブ心理学の分野から，プロアクティブ・コーピング理論が提唱されている。この理論は，ストレスとなる出来事との時間的な見通しにより，その出来事に対する認知的評価や対処が変化するととらえ，4種類のコーピング(Reactive coping, Anticipatory coping, Proactive coping, Preventive coping)に分類されている。この理論に基づき Proactive Coping Inventory が作成されているが，わが国におけるプロアクティブ・コーピングに関する研究はまだ少ない。そこで本研究では，乳がん患者の心的外傷後成長がプロアクティブ・コーピングおよび精神的健康とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とした。</p> <p>対象は，乳がんの診断を受け外来通院している患者で，2017年12月～2018年7月までの7か月間，連続的にサンプリングを行った。選択基準は，2010年4月1日～2018年3月31日までに初めて乳がんと診断された20歳～70歳の患者である。調査項目は年齢や婚姻状況，診断からの期間や診断時のステージなどの基本属性と心的外傷後成長尺度日本語版 (Posttraumatic Growth Inventory-Japanese: PTGI-J)，Proactive Coping Inventory 日本語版 (PCI-J)，そして精神的健康状態は General Health Questionnaire (GHQ)の日本語版を用いた。解析にあたっては，PTGI-J得点とGHQならびにPCI-J得点間の相関係数，診断からの期間および診断時のステージとPTGI-J得点，GHQ得点，PCI-Jの各下位尺度得点間の相関係数を算出した。次にPTGI-J総得点と基本属性，PCI-J，GHQの各得点との関連を単回帰分析により検討し，PTGI-J総得点を従属</p>			

変数，単回帰分析で関連の見られた変数を独立変数として，強制投入法による重回帰分析を行った。

120名に調査票を配布した。そのうち80名から回収が得られ（回収率66.7%），80名すべてを解析対象とした（有効回答率100%）。各項目間の相関では，PTGI-J総得点と社会的活動障害およびうつ傾向の間に有意な負の相関を，PTGI-J総得点とPCI-Jのすべての下位尺度得点との間に有意な正の相関を認めた。診断時のステージと各下位尺度間では，PCI-Jの能動的コーピング，内省的コーピング，計画的コーピングとの間で有意な負の相関を認めた。重回帰分析の結果，乳がん患者の心的外傷後成長に影響する要因として，能動的コーピング，感情面でのサポート模索，回避的コーピングが抽出され，モデル全体としては分散の37.8%が説明された。

乳がんという病と向き合い，それを否定的に捉えずこれまでの人生観や健康観，自己を取り巻く世界に対するとらえ方を柔軟に変容し，自分に起きた出来事の結果に対して責任を負うという信念が能動的コーピングを高め，心的外傷後成長に影響したと考えられた。また，人がストレスに対処する際には，信頼できる人との関係の中で安心して悩みを話せることが重要であり，そのような感情面でのサポート模索を行うことで心的外傷後成長の上昇が期待できると思われた。回避的コーピングについては，ストレス反応や負の感情を増加させると言われている一方で，回避的コーピングの用い方によってはストレス低減に影響を及ぼすことが報告されていることから，心的外傷後成長のプロセスには回避的コーピングも必要であると考えられた。以上のことを踏まえて，乳がんと診断されたことによって生じた長期的な葛藤に対しては，能動的コーピングを用いて問題と向き合いつつ，治療過程の中で生じる日々のストレスには適宜，回避的コーピングを用いるよう支援することが，精神的健康の悪化を防ぎながら心的外傷後成長を高めていくことにつながるということが示唆された。そして，支援の際には情緒的支援が得られるような環境を整えることが重要であることが明らかとなった。

以上の結果から，本論文は，乳がん患者の心的外傷後成長とプロアクティブ・コーピングとの関連を明らかにし，ストレスマネジメントの一つとしてコーピング能力を促進する介入方法を構築することが，心的外傷後成長につながるという示唆を与えたことから，乳がん患者の生活の質（quality of life）の向上に大きく貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は，本論文が著者に博士（保健学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。